

ユーカラの言語*

切替英雄

2005年10月14日

アイヌ語学のパイオニア金田一京助（1882-1971）によって採録された叙事詩（ユーカラ）の一つに草を食む鹿を描いた魅力的な一節がある。

Hánke-uk-pe	（草を）近くから食むものは
ko-kíraŭ-riki-	そのために角を高々と
púnpa kane.	上げている
Tújma-uk-pe	（草を）遠くから食むものは
ko-kíáŭ-ši-ka-	そのために角を背に
omáre kane.	乗せている

すぐ足元の草を食む鹿は頭を垂れ、そのために角が高々と立つ。遠くの草を食む鹿は頭を前方に伸べて、そのために角が横になり背に載っているように見える。

アイヌは近代にいたるまで狩猟採集民の面影をよく残した民族である。農業革命を経て産業革命の波に洗われ、「高度情報化社会」*¹に達した現代に生きる我々にとって、この民族の口承文学を理解し味わうということは難しい

* 原文 エスペラント “La Aina — lingvo de jukaroj” 『エスペラント』日本エスペラント学会 2005.11. 22-23.

*¹ 高度情報化社会と呼ばれるものは、私の考えによれば二進数 binary system によって構成されたデジタル信号 digital signal を自在に操る社会のことである。

ことだ。なぜなら我々はもう既に、農業社会以前の言語芸術を鑑賞する能力を失っているからだ。

ユーカラは我々がファンタジーと思うものとおよそかけ離れている。ユーカラの朗誦に聞きほれ涙を流し、また笑ったアイヌの感情を日本人（sisam シサム。ここでは日本国民ということではない）が心から理解し、共感することはほとんど不可能なことだと思う。

そこで、上で示したユーカラの一節は例外的に鑑賞のたやすいものということになる。我々はそこから明瞭なイメージを得ることができる。またある種の感動さえも覚える。一口に言って、かつての狩猟民の感覚に触れることができる。しかしユーカラの大部分は非合理で、現代人の鑑賞を拒んでいる。そのような例をあげたい。

海の向こうから美しい娘がやってきた。彼女はとても美しかったけれども、鼻にかすかな奴婢の面影があった。彼女は私（ポイヤウンペ、ユーカラの主人公）に、敵の手に捕らえられた女主人を救い出してくれるよう要請した。それを聞くと、私は彼女をつかんで海の中に飛び込んだ。私は魚の群れよりも早く海底を走った。途中一度浮かび上がると、娘は首をがっくり垂れていた。海の向こうの国に着くと、娘は既におぼれて死んでいた。

Pírka pon menoko	美しい娘は
retár šiknum-kan	白い目玉を
i-j-é-sanke.	私に向けてむいていた。
Šiknum-kaši	目玉の上には
húre kemrit	赤い血管が
e-ár-utasa.	縦横に走っていた。
Oán-raj keŕe	すっかり息絶えた死体を
san-ót a-kurka	砂浜の上に
a-ko-ósura.	私は投げ捨てた。

私（筆者）の感覚ではこの罪のない娘の死は受け入れられない。娘は少なくとも敵ではなくて味方の一員である。これは非合理で無意味な殺戮ではなからうか。また、私は死体に対する微視的な観察をいとわしく思う。なんという残酷さか。そして私にはヒーローがなぜこんなに粗暴で気違いじみているのか理解できない。しかし、ユーカラは、このように不合理でいとし、おそろしい残忍さに満ちている。騙し、怒り、逃走、追跡、空中格闘、割り殺し、折り殺し、押し殺しなどなど。

ユーカラの言語それ自体はアイヌの木彫や刺繍と似て豪華、華麗、絢爛である。木彫と刺繍は、それぞれ男子とその妻たるべき女子の教養であって、これに巧みであることはアイヌ社会でエリートの徳目の一つとされていた。男子にあっては、言語のテクニクを磨くことも修養の方法であり、雄弁の才もまた徳目の一つであった。日本人とは異なり、言語が必要悪とみなされることはなく、高い言語能力を持っている者は尊敬された。そのため、ユーカラの言語は高度に発達し、特に形態法の面で過剰にみえるほど複雑なものになった。

例えば、日常語の

pírka wakka sán 清い水が流れる

に当たることをユーカラの言語では

pírka wakka 清い水が
êi-sána-san-ke 流れる

と歌う。

sán「川を下る」と sána「川下に位置する」はどちらも名詞 sá「川下」から作られた複合動詞である。sána-san「川下に位置するように川を下る」は冗長な複合であって、単純な sán と同じ意味でしかない。

êi- は不定人称（英語で one などで、フランス語なら on で、ドイツ語なら man、エスペラントなら oni で示される人称。ここでは「人」と訳す）を

示す接頭辞の主格形で、-ke は使役接尾辞である。そこで *či-sána-san-ke* は二重に冗長であるということになる。「人が（誰それをして）川下に位置するように川を下らせる」つまり「（誰それが）川下に位置するように川を下る」この堂々とした形態が意味していることは単純な構成の *sán* 「（誰それが）川を下る」が意味していることと変わらない。

また例えば、

a-sikíhi 我が眼

で済むことを

a-eínkar pe 我がそれもて見るもの

とわざわざ歌うことがある。冗長かつ迂言的である。ユーカラはこのように句に満ちている。

ところで私は、アイヌが木彫とか刺繍、またユーカラの言語の彫琢のような非日常的なことに価値を見出していたところに興味を持つ。tekétok 「手の器用さ」と *paúétok* 「雄弁」と並ぶ男性のもう一つの徳目は *ramétok* 「度胸」であるが、それでもって男たちは山に熊を狩り、海にメカジキを狩った。これも非日常的な行為である。これらの徳目はいずれも実際の生活を維持していく上では無力である。重要な食料源であった鹿と鮭の捕獲にあって、このような徳目は要請されない。

彫刻や刺繍が施されたものは祭りのために、言い換えるなら、神々のためにとって置かれた。ユーカラの言語は日常会話には用いられず、祈りで、つまり神々へのメッセージで用いられた。熊やメカジキを狩ることは生活を維持するためになされたのではない。それどころか、それらは一種のスポーツ、遊びであって、命を危険にさらして功を求め^{いさおし}るものであった。しかし、熊とメカジキは高位の神であった。それらを狩るというのは、単に狩り・スポーツというのではなく、招くということであった。獵人は、人間の世界への客人としてそれらの神々を招く。熊とメカジキを客としてもてなす

ことはアイヌの生活にあって、最も名誉なことであった。とりわけ生まれたての小熊を捕獲し、里親としてこの神の子を育て、一年後、神の国にいます親の元に送り返すことは男の中の男だけができることであった（母熊は当の男が前年仕留めているのである）。なお、蛋白質と脂肪の主な供給源は鹿と鮭で、それにもかかわらず鹿と鮭は神の位に入らない動物であった。日常的に過ぎるからであろうか。だからこそ熊を狩らない男でも、また女でも鹿や鮭なら獲れた。

この三つの徳目の練磨は、経済的にはまったくむなしいことだった。しかしおそらくアイヌは情熱をもって自らを鍛えたに違いない。それが神々からの恩寵と、人々からの尊敬が得られる道であったから。まことに人はパンのみに生きるにあらず。

しかしこれら伝統的な価値観への執着はこの民族の衰退の原因ともなった。日本の開拓民はアイヌの価値観にまったく無関心であった。彼らはアイヌの社会構造に寸毫も配慮しなかった。従来 of 社会的な価値観が無視され、エリートたるべき者の徳目が無意味になった新時代、指導者層にあった多くのアイヌが尊敬と誇りを失ない、同時にアイヌ社会も有能な指導者を失ったに違いない。私はこれらのことが、見過ごされてきたけれどもアイヌが日本人に対して衰退した一つの大きな原因だったと考えている。

また、明治政府の勸農政策に対しても十分に応じることができなかった。アイヌの男たちは地べたを這うようなこととして農作業を卑しんだに違いない。そんなことは、もしやるとするならば、女がするべきであった。事実そうした。これもまた衰退の決定的要因だったと思う。

なお、徳目にはもう一つあって、それは *sirétok* というものであった。これは「優れた容姿、容貌」ということで、おそらく素性 *sínrit* ということに関係している。先のユーカラの一節にあった鼻に残るかすかな奴婢 *sirúnkur*（地べたに住まう者）の面影というのは、美しい娘が *sirétok* を備えていない卑しい身分の女であったことを示している。階級のなかった原始共産制社会などというものは近代人のファンタジーにすぎない。